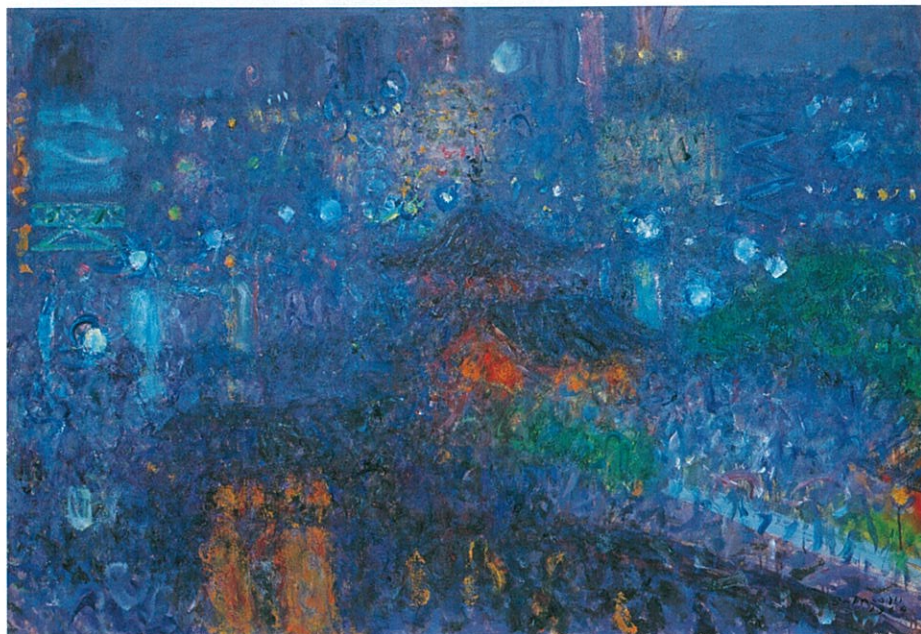


宮本三郎

東京暮色 都市の風景 変わりゆく光

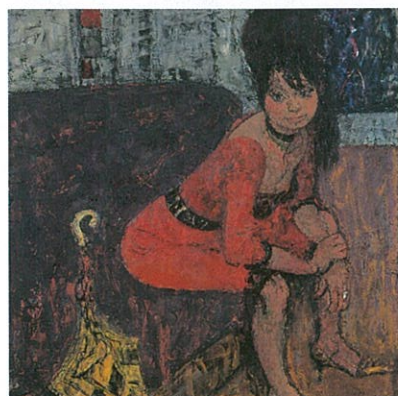
4月1日 土 - 7月23日 日



〈上野夜景〉1964年



〈夜景(ビルの窓)〉1965年頃



〈彌子〉1962~64年頃

昭和という激動の時代に活躍した画家、宮本三郎の作品には、その時々日本の世相、風俗、文化が反映しています。昭和初期、和と洋が混交する女性の装いに美を見いだして描いた作品。戦時中、従軍画家として描いた戦争記録画の数々。戦後、各方面で活躍する女優や歌手を描いた作品など、時代を映す鏡のごとく、その作品からは、当時の日本の生活環境や社会状況が垣間見えます。

このたびの収蔵品展では、1960年代半ばに宮本三郎がしばしば描いた、東京各所の夕景・夜景をご紹介します。高度経済成長期の東京、変容する都市の風景について、宮本は次のように記しています。

「やつぎばやに建てられて来た高層建築や、高速道路の出現で、ここ東京の景観は日に日に更新されている。新しく生まれるホテルのバーや食堂は、その最高層に設計されているが、ここの客ともなれば、生存の闘いや、歳末の苦渋など、しばし忘れて、明滅する光の抽象的美観として、自身のマンモス都市を客観しながらうっとり楽しむことができる。」(「皇居前夜曲」『読売新聞』1967年12月25日夕刊)

このように宮本は、戦禍による荒廃から急速な復興を遂げ、首都・東京が変わりゆく様子を興味深く見つめていました。とりわけ、自動車のライトや、林立するオフィスビルから漏れる灯り、繁華街を彩るネオンサインなど、夜の街を照らす無数の光源の出現に、画家としての創作意欲が掻き立てられたようです。宮本が描いた東京は、夕闇迫り来る街に色とりどりの電光が交錯し、幻想的な雰囲気を感じ出しています。それはまさしく「明滅する光の抽象的美観」であり、その創作意図を明確に物語っています。

古くは月明かり、そしてガス燈を経て、光と闇の関係は、様々なかたちで絵画のモチーフとなってきましたが、ここで宮本は、電光の動静、その強弱の対比、そして色彩の調和をキャンバス上に表現したのです。

今なお再開発が進み、東京の景観は日々変わり続けていますが、約40年前、画家が新鮮な想いで見つめ、描きとめた都市の風景を通じ、往時に思いを馳せつつ、暮れゆく街並みの様子をお楽しみいただければと思います。